

イザヤ書6章「天からの召し」

1A 高く上げられた御座 1-7

1B ウジヤ死後 1

2B 聖なる方 2-4

3B 罪深き自分 5-7

2A 預言者への召し 8-13

1B しもべの姿 8

2B 頑なな民 9-13

本文

私たちの学びは、イザヤ書 5 章まで来ました。今晩は 6 章を読みたいと思います。6 章から 9 章は、イザヤ書の中でも、ものすごく内容が詰まっている箇所です。その中心人物が、インマヌエル、神が共におられるという方が、ダビデの子として来られるという預言です。その始まりは、イザヤが改めて預言者として神に召されるところであります。

1A 高く上げられた御座 1-7

1B ウジヤ死後 1

^{1a} ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。

ウジヤが死んだ年に、イザヤは召命を受けています。けれども、1-5 章を見ての通り、ウジヤが存命中の時から預言をしていました。自分の働きは預言をすることであることは知っていたのですが、神から呼ばれて預言をするというのはどういうことなのか、この時に初めて悟ったのだと思われれます。

つまり、彼の召しは段階を踏んでいました。モーセもそうでした、40 歳の時に自分がイスラエル人を救うために召されていたと思っていたけれども、神に召されるのは 80 歳の時でした。ダビデもそうでした。彼が油注がれたイスラエルの王になるのは分かっていたけれども、初めはサウルに追われる身であり、実際に王になったのはずっと後のことです。

ペテロのことを思い出してください。彼は、召された時にはすでに、この方の弟子でした。ヨハネ 1 章では、兄弟アンデレに呼ばれて、イエス様のところに行っていました。ところが、ルカ 5 章を見ますと、彼は漁をしています。いわば、パートタイムの弟子のようになっていたのでしょうか。けれども、魚が一匹もとれなかったのに、イエス様に命じられて網を降ろすと大漁であったので、罪深さを感じました。それで、イエス様が、人の漁師にすると言われて、それについて行ったのです。

クリスチャンであれば、誰もが神の召しについて気にしていると思います。神の救いに預かること自体が、神に召されたことを示しています(ローマ 8:30)。そして、神の救いを受けた者としてこの地上でどう歩むべきか、考えておられるかもしれません。神から召されることがどういうことか、神からの語りかけを受けることを祈ります。

ここで、ウジヤ王が死んだ年に、イザヤが主なる神の御座の幻を見たということに注目したいと思います。イザヤは、ウジヤのそばにいた人で、歴代誌第二 26 章 22 節に「ウジヤについてのその他の事柄は、最初から最後まで、アモツの子、預言者イザヤが書き記した。」とあります。ウジヤは 52 年という長い期間、ユダの国を治めました。彼は晩年に聖所の中にはいるという罪を犯し、ツアラアト(らい病)を患いますが、それまでの間は、主を求め、主の目に適うことを行っていたことでした。それゆえ神は彼を栄えさせていました。ペリシテ人など、周囲の敵と戦い、制圧し、貢を納めさせていました。彼の名声は、エジプトの入口にまで届いたとあります。それから、やぐらをエルサレムに立て、水溜もたくさん作りました。彼は農業にも従事していました。今のイスラエルの建国の父、ベン・グリオンもアラブ人との戦いで勝利を収め、退職後はネゲブを緑にするという事業のためにネゲブに家を構えたということですが、ウジヤも、似たような有能な、信頼して安心できる王だったのでしょう。そして、精鋭部隊を持ち、優れた兵器も備えていました。

そんな中で、中にいるユダの民、エルサレムの住民は安心して暮らすことができました。けれども、霊的には、徐々に妥協が起っていて、その不正についてイザヤが 1 章から 5 章まで預言していたということになります。

けれども今、ウジヤが死にました。それまで、水道の水、あるいは電気のように当たり前を考えていた恩恵がなくなっていました。自分たちが頼りにしていた覆いを取り除かれました。ウジヤが死んだのは紀元前 740 年ですが、745 年にアッシリアのティグラト・ピレセルが王位に付き、周囲の国々の侵略を開始していました。ですからウジヤが今、いなくなつては困るという状況だったのです。いったい、この国はどうなるのか?という焦りと動揺が国中に広がっていたと考えられます。そして、イザヤ自身もそうであったと言えます。イザヤは、ユダにある不正を示されていて、それを叱責していました。けれども、彼自身、ウジヤ王によって与えられていた安全に拠り頼んでいました。今、その安全が取り除かれて、イザヤ自身も衝撃を受けているのです。

これはちょうど、比較的安定した環境の中にいる私たちキリスト者に似ているかもしれません。職が与えられている。家庭もことさらに大きな事件は起こっていない。健康も守られている。指導者も健在だ。このような状況の中で、けれども主なる神を知り、この方を愛して、イエス様を信じていると言えるかもしれません。そこで、自分が病にかかった。職を失った。愛する指導者がいなくなった、となります。その中で拠り頼むべき方が誰なのかを試されるのです。

イザヤは、ウ ज्या王が死んだ後で、「高く上げられた御座に着いておられる主」を見えています。ウ ज्याが王座についていたからこそ、もっと高いところにおられる王座が見えなくなっていた、ということが出来ます。彼は、人に拠り頼むユダの人々に対して預言して責めていましたが、彼自身もその非を免れないでいたのでしょう。私たちは、自分の頼りにしていたもの、頼りにしていた人がいなくなった時にこそ、それまで見ていたクリスチャンとしての世界が、一気に広がる、まことの天の王座から眺める神の世界への視野が広がる良い機会となるのです。

2B 聖なる方 2-5

^{1b}その裾は神殿に満ち、²セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、³互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」⁴その叫ぶ者の声のために敷居の基は揺らぎ、宮は煙で満たされた。

いと高きところにある御座の情景です。御座から出ている裾が神殿に満ちています。王の威厳は、その裾の長さにあると言われます。それが、神殿に満ちています。そしてその上に、セラフィムという御使いがいます。「燃えているもの」という意味があります。顔と足を覆っているのは、主にに対して礼拝する姿、ひれ伏し、へりくだっている姿を表しています。そして、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主」と叫んでいます。三度も、「聖なる」と叫んでいます。ここで、セラフィムは三位一体の神をほめたたえているのではないかと、とも言われています。御父、御子、聖霊の神に対しての礼拝です。そして、敷居が揺るぐほどの声ですが、これは神の栄光を表しています。ちょうど、重低音がスピーカーから流されると、振動で回りが揺れるのと同じです。そして、煙はシナイ山に主が降りてこられた時の煙と同じで、主の栄光の臨在を表しています。

ヨハネの福音書にて、この栄光が実に、主イエス・キリストご自身であることが書かれています。「12:41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語ったのである。」実は、イザヤは、主イエスご自身の栄光を見たのでした。

3B 罪深き自分 5-7

⁵私は言った。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王を この目を見たのだから。」

これが、聖なる主ご自身の姿を見た者の姿です。「滅んでしまう」というところまでになりました。彼は、ユダとエルサレムを指して、その不正を責め、正していましたが、今、聖なる神と主イエス・キリストご自身の栄光を見て、私こそが神の裁きを受けるべき者だと悟ったのです。5章の内容を思い出してください、イザヤは「わざわいだ」と言って、ユダにある悪を責め立てたのです。それが、

自分自身の中にもあることを知って、愕然としています。

そして、「唇の汚れた者」と言っていますが、これが預言者としては致命的なことです。神の言葉を受ける預言者として、その口が清められていなければいけないのに、そこから災いをもたらす言葉も出していることに、聖なる神の臨在に触れて気づいたのです。ヤコブが信者たちに対して、「ヤコブ 4:10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」と言いましたが、その過ちに彼は気づきました。「唇の汚れた民の間に住んでいる」と言っていますが、その汚れに対して自分は預言をしていましたが、自分自身もそれに汚れていたことに気づきました。

このように、聖なる神の臨在、イエス様の栄光に触れた者は、自分自身に愕然とします。普段、私たちの自画像、セルフ・イメージは、絶えず他者との比較によって形成されています。それで、自分はまだできていない、どうしようもない、とかいろいろ考えるのですが、まだまだ人間や社会との比較の中での範疇で考えているのです。絶対的な義と聖をお持ちの神の前に出る時に、それどころではない、自分の実在、存在の根底から破壊されるような、圧倒的な罪深さに気づくのです。

聖書において、主に召されて、主に従っている人々は、この出会いをしています。ヨブは正しい人ですが、最後に主ご自身が現われて、自分が悟り得ないことを告げたといって、「自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(42:6)」と言いました。ダニエルは、神に愛された人、誰が見ても非の打ちどころがない人でしたが、主の栄光の姿を見て「内からは力が抜けて、顔の輝きも一変して、力も保てなくなった。(10:8)」と言いました。そしてペテロですが、先ほど話したように、イエス様の大漁の奇蹟を見て、こう言いました。「ルカ 5:8 主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」

私たちは、へりくだり、とか、謙虚ということを考える時に、絶えずこのことを思い出しましょう。「主との出会いによってのみ、初めてへりくだることができる」ということです。いかに表向き、自分がへりくだっているようにしていても、それは見せかけで、へつらいの罪から免れることはできません。主との日々の出会いによって、そこでイエス様の聖いお姿に触れることによって、その清められた心によって主に仕えることによってのみ、そこに初めてへりくだりが生まれます。

⁶ すると、私のもとにセラフィムのひとりが飛んで来た。その手には、祭壇の上から火ばさみで取った、燃えさかる炭があった。⁷ 彼は、私の口にそれを触れさせて言った。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」

すばらしい神の愛と恵みです。イザヤがこのような罪人であるにも関わらず、彼が何もできないにも関わらず、主が一方的に彼の咎を取り去り、罪を赦して下さっています。主の召しを受け、そ

の働きをする人は、第一に、自分が救われないといけないう罪人であり、神の恵みによって今の自分があることを知っている人です。

セラフィムの一人が、手から祭壇の火によって燃えさかる炭を持ってきました。そして彼の口に触れます。祭壇は、地上の祭壇では、牛や羊などをほふって、それを祭壇の上で焼き、主に対するいけにえを献げます。それによって、主が罪に対する罰を身代わりに動物が受けたとみなして、その罪を赦してくださいます。その罪の赦しの火をもって、イザヤのくちびるを清めてくださったのです。かつて、イザヤ自身が預言した言葉のとおりです。「1:18 さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

2A 預言者への召し 8-13

そして、この一方的な恵み、一方的な憐れみによって、初めて主はイザヤを遣わします。私たちがこの世にキリスト者として生きていること、そしてキリスト者としてその働きの中に従事すること、それは聖なる主を見て、圧倒的な罪深さを知り、それを一気に包み込み、覆い隠す、さらに圧倒的な神の恵みによるものであります。全く働きの価値のない者、ましてや全く生きる価値のないことを知った時に、主が私たちを呼び出されます。そして、もはや自分がより正しいから、正しくない人に福音を伝えるということではなく、自分が畏れ多き神の恵みを受けたから、それで主に仕えているのだ、という意識に変えられます。この出会いがあるからこそ、もはや自分の肉ではなく、御霊に頼ることができるのです。

使徒の中でも最も多くの働きをした使徒パウロが、こう言いました。「1テモテ 1:12-14 私は、私を強くしてくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださったからです。私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。」パウロは律法の義に熱心な者でした。その義に熱心であったばかりに、かえって自分が何をしてきたのか分からなくなっていました。キリスト者を迫害し、暴力をふるっていた者であり、そうやって神を汚していたことを、彼はイエス様に出会って悟ったのです。ですから、彼は「罪人のかしら」と言っただけでなかったのです。それで、彼は神の恵みの福音を伝える器となりました。

1B しもべの姿 8

⁸私は主が言われる声を聞いた。「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」私は言った。「ここに私がおります。私を遣わしてください。」

三位一体の神がイザヤに語りかけておられます。「われわれのために行くだろうか」と尋ねてい

ます。そしてイザヤは、ここで完全な僕の姿を取っています。「ここに私がおります」と言っています。これは、「あなたのなさること、お語りになること、何でも従わせていただきます。」という、しもべの姿です。「私は、これこれのことであれば、やらせていただきます。」という条件を付けませんでした。私たちはどこかで、いつもこれをやりたい、これはやりたくない、これならできる、あるいはできないという選り好みをしています。そうした自分をどうすれば捨てることができるでしょうか？神の恵みによることしかできません。聖なる神に触れられ、全き魂の砕きを経験し、それから神の一方的な恵みに触れる時に、自分というものが無くなります。

それから、「私を遣わしてください」と言いました。「お使いがあるのでしたら、どうか私を使ってください。」という姿勢です。しばしば英語においては、「主に用いられているためには、ability ではなく、availability である。」と言われます。自分ができるかできないかではなく、主に命じられることに対して、いつでも直ちに応じられる状態にしておく、ということです。

2B 頑なな民 9-13

⁹ すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。¹⁰ この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」

主は、イザヤに成功しない働きを示されました。語っているのに、悟ってもらえない。見ているのに、知ることはない。なぜなら、心が肥え鈍り、耳が遠くなり、目が閉ざされるからです。これは、見たい、悟りたい人を主が頑なにさせているのではなく、彼らが頑ななのに、主がそのままにしておかれるということです。

ここが、召しが、主の働きをする時に絶対的に必要である所以です。自分が主のために働いても、その恩恵を受ける人々が感謝するとは限らないのです。いや、無視したり、反発することのほうがむしろ多いのです。そうした困難の時に、残っているのは、「主から命じられているかどうか？」ということなのです。主がそうしなさいと命じられているのであれば、行うという、神の召しが必ず必要です。

イザヤは、ウジヤの時代、ユダとエルサレムの中に不正と不義を見ました。それに義憤をもっていました。しかし実は、これからはウジヤの時代とは比べ物にならないほど、ユダが落ちていくのです。7章からは、ウジヤの孫、アハズの時代におけるイザヤの預言活動を見ていきます。ウジヤの時代とは比べ物にならないほどの、とてつもない墮落した世となっていきます。

アハズが、北イスラエルのように、いやそれ以上に偶像礼拝を取り入れていきます。そして、周囲の敵から攻められて、何と北イスラエルとアラムから攻められそうになります。このような危機の

時代に突入する前に、イザヤが主の王座の幻を見ることは実に幸いなことでした。安定や平和がますますなくなる時代になっている時に、はっきりと主が御座におられることを知ることはとても安心することです。どんなに時の流れが激しかろうと、主の側に付き、主のことばを語るためには、必要なことです。

そして何よりも、イザヤが恵みによって神の働きをすることができるようになったことは幸いなのです。自分の能力、自分の素質、自分というものが少しでも残っていれば、いくら自分が他の汚れから離れていると思っていようと、自分もその非を免れないのですから、その濁流の中に飲み込まれていきます。神の全き恵みの中にいるからこそ、徹底してしもべの姿を取ることができます。全ての裁きを主に任せます、自分で判断しません。自分は主が語られることをそのまま伝え、主から命じられることをそのまま行います。その他のことは主が行われる、ということを知ることができます。だから人々が反発しようと、主がここにおられ、主が恵みをもって私を召してくださったのだから、それは自分に関係のないことだと悟ることができるのです。

そして、この預言の言葉は、新約時代の言葉であり、イエスご自身の言葉であります。イエス様は何度となくこの言葉を引用されて、その時代にご自分の言葉を受け入れることを彼らが拒むことを語られました。使徒たちも引用しています。

真理の言葉というのは、その性質からして受け入れられないものなのです。だから、私たちは語れば語るほど、それに応答しない人々の姿を見ます。だからこそ、私たちは自分の天からの召しを確信する必要があります。人がどう反応するかによって私たちは生きません。見た目の成果によって私たちの行動を決めません。あくまでも、主の恵みの中にある、主との出会いの中にある関係、その交わりの中に生きて、その源から力を得て生きる道を選んだのです。ですから、自分は上から、天から御霊によって生まれた者なのだという確信が必要です。そして、ここは故郷ではなく、旅人なのだ。そして、主はご自分のところに私たちを連れていくために、戻ってこられるのだという召しの確信が必要なのです。その上で、今、この地上で行うことを神は命じておられるのです。

¹¹ 私が「主よ、いつまでですか」と言うと、主は言われた。「町々が荒れ果てて住む者がなく、家々にも人がいなくなり、土地も荒れ果てて荒地となる。¹² 主が人を遠くに移し、この地に見捨てられた場所が増えるまで。

これは、ユダの民の長い歴史を預言しています。北イスラエルはアッシリアによって、そして南ユダは、バビロン捕囚によって、彼らの町々は荒れ果て、遠い国に移されました。そして、その歴史は繰り返えされ、新約時代はローマによって紀元 70 年に引き渡されました。

¹³ そこには、なお十分の一が残るが、それさえも焼き払われる。しかし、切り倒されたテレビンや

樜の木のように、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔。」

残っている者は非常に少なくなります。ここで言っている「残っている者」とは、物理的に生き残っている者という意味以上に、霊的に生き残っている者たちのことです。そうです、主に信頼している民のことです。彼らが聖なる裔、と呼ばれます。パウロたち、イエスをメシアとして受け入れたユダヤ人たちは聖なる裔であります。

今回は、イザヤが、アハズに対して預言するところから始まります。

主に召されるということ、イザヤに対する召しから知りました。今は、当時と同じように、暗闇が増している時です。けれども、それであっても、まっすぐに真理のことばを語ることのできる力が、神の恵みに触れることによって与えられていることを知りました。